



# 地域支援ネット架け橋

## ニュースレター 12月号

それゆえ、あなたがたは行って

2017年12月3日 発行 No19

イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」

マタイによる福音書28章18節～20節

---

### 活動報告

#### 4ヶ月間の被災地活動

2017年7月から10月までの活動。「お見舞い」「地域夏祭り」「子供会支援」「茶話会」「家庭訪問」「地域シニア会による小旅行」「キリシタン史跡ツアー」などを企画・開催しました。

#### ① お見舞い

震災から7年目を迎えた昨今、入院される方々が増えているように思います。高齢者、後期高齢者との関わりが圧倒的に多いので、そう感じるのかも知れません。

最近、40歳代の女性Aさんが、日赤病院に緊急入院しました。Aさんは、震災前から「潰瘍性大腸炎」と診断されていて、薬を常用していました。Aさんは、常に水を必要としていたのですが、津波の被害から免れたという理由で、物資を受け取ることができませんでした。避難所を訪ねても物資が貰えず悩んでいたとき、避難所の方から物資が貰える団体の情報を得、私と出会ったのです。Aさんは、南三陸町での星野富弘展を開催するにあたり、大きな力を貸してくださいました。今ではAさんの家族とも良いお付き合いをさせていただいています。そのAさんが今年の夏に緊急入院をして、病状が悪化していることを知りました。Aさんから祈りの要請を受け、今に至るまで毎日名前を覚え、癒しを祈り続けています。ある日、中澤佳子姉と相談し、Aさんに洗礼を受けることを勧めました。Aさんは、数年も前から信じていることを告白し、祈りを共にしてきました。携帯電話で毎日のように聖書のメッセージを送り、洗礼を受けるように勧めましたが、心では信じていても、今回はAさんの置かれている立場がそれを許しませんでした。Aさんは、歴史上著名な一族本家に嫁いでいて、それを守らなければならない立場でした。Aさんは「信じる事に欲張りであってはいませんか？」とまで語っておられ、イエスさを信じる思いを明確にしておられます。Aさんは、1ヶ月入院して薬投与をした結果、退院が出来るまで体力が回復しました。ある日、Aさんから電話で「お会いできませんか」と連絡をいただき、「もくもくランド」という道の駅で合流しました。今までのことや、これからことを話し合い、最後に手を握って祈り合いました。Aさんは、明確にイエスさまに信頼して生きていこうとしていました。Aさんは数日後、志津川の「光塩キリスト教会」の礼拝に出席されました。礼拝では、聖書に登場する女性についてのメッセージが語られ、心の癒しを体験されたようです。

#### ② 反省と決意

被災地の現状は、Aさんも含めて「復興」という言葉に支えられて前に進み、今では終の住処を得て、日々の生活を営む時となりました。支援者にとって災害支援は、仮設生活を終えた時点で終結されたと言ってよいでしょう。しかし、魂の支援は今も続き、それが私の取り組みです。震災直後、何も分からないまま被災地へと押し出され、多くの人々と協力しながら支援に付き合い、様々な方々との関係を構築しました。これまでとは違った関係の構築方法に戸惑いながらも、そこから沢山のことを学びました。それ

な方々との関係を構築しました。これまでとは違った関係の構築方法に戸惑いながらも、そこから沢山のことを学びました。それは、反省の連続でもあり、いつも「これでよいのだろうか？」と、自問自答の日々でした。

私は牧師ですから、当然震災以前から人々の魂を思い、布教活動をしてきました。しかし、震災を境に、私の布教への思いが、神さまの光のもとで問われていることに気付かされました。震災前の私は、信じる者と信じない者との間に区別を設け、自分の正しさを目線に、人々と接していました。平等の目線で接する感覚が欠けていたのです。信じない者は仕方がないと、すぐに一区切りをつけ、私による布教を拒む者に対し、線を引いていたのです。私は、丁寧に、敬虔に、みことばを届けていませんでした。それは、異教徒に対しても、一線を引くような姿勢であり、嫌悪感さえ抱くような始末でした。

### ③ 誰にでも、死の間際まで、希望がある。

震災後、「信頼できるお方がいる」というメッセージ、救い主との出会いのチャンスを発信し続ける、それが私の役目であることに気付かされました。私と関わる対象者が、「尊いお方を知りたい」と、求めてくれるような関係を構築したいと、日々奮闘しています。その試みのひとつが、被災地での追悼記念です。

### ④ 毎年3月11日に、被災地で追悼を共にする。

「宮城三陸3.11東日本大震災追悼記念会」が南三陸町からはじまり、今では気仙沼市、石巻市でも継続されています。なぜ、追悼会を継続しようと思ったのでしょうか。震災が起きた3月、遺体安置所を訪ねる経験をしました。その日、安置所では、小学生の女の子と男の子が、おじいさんとおばあさんに連れられ、すでに亡くなられた母親の遺体を見つけたのです。「お母さん」と叫び、泣き崩れる場面は私の眼に鮮明に焼き付き、未だに色あせることがありません。私もそのお母さんを目にしたのですが、それは眠っているようで、今にも起き上がるのではないかと感じるほどでした。二人の子どもさんたちは、お母さん呼びかけ続けるのですが、応えることはありません。私は真っ先にその場を離れ、車で待機しました。まことの神さまを信じる牧師でありながら、何の声掛けもできず、一言のメッセージも告げることができませんでした。きっと、二人のお子さんたちは、希望を失い、不安で心がいっぱいだったでしょう。生きていれば、将来に渡って良きアドバイスを与え続けてくれるお母さん、そのお母さんを亡くした悲しみは計り知れません。もし、生きておられた時に、お母さんにも福音のメッセージが届けられていたらと考え、心が締め付けられるような思いでした。せめてそんな子どもたちや、この地に残された人たちに、希望を与えたいという後悔の思いや願いから、追悼会を執り行うことになりました。それは、単なる行事であってははいけません。誰もが、その意義を理解できるようなメッセージ性のある式典でなければいけません。子どもから大人まで、すべての人が親しみをもって理解できる追悼です。決して伝道会のようなものではありません。人を悼む式典であり、出席者が希望をしっかりと抱ける追悼でなければなりません。それは、個人に問い掛け、自ら発見し、気がつき、理解できるような追悼が必要なのです。これまでも、今後も、常にこの点に注意を払いながら、企画を進めています。

### ⑤ どんなに時間が掛かっても、

どんなに時間が掛かっても、正しい理念を持ち、丁寧に向き合うことで、最も正しい神さまが最善を成して、成長させてくださいます。成長は、一見なんでもないようなことの中にも、重要なことが隠れていると気付くことから始まる、そのように現場で教えられています。現在もこのようにして、隣人とのお付き合いが、様々な形で継続されています。

### ⑥ 夏祭り支援

7月から8月末にかけて、沢山のイベントがありました。地域支援は週に二度開催されますが、そこでの活動の中心は、コミュニティを支援

することです。仮設から退居されて復興住宅地へと移転する中、隣接する方々はお互いに馴染みのない見知らぬ人たちです。コミュニティ支援は、地域で活動する支援センターの方々と一緒に協力をして、交流を深めようというものです。コミュニティ支援を考える上で、「架け橋」が大切にしてきたもう一つの働きは、クリスチャンの存在です。残念なことですが、クリスチャンの方たちの地域支援は、コミュニティに対する理解不足の上に行なわれて来たように思います。だからクリスチャンは、「別者」と見られる傾向が顕著で、マイナスイメージが払拭されないまま今日に至っています。「架け橋」は、敬虔なクリスチャンの姿を示しつつ、隣人に誠実で、クリスチャンとしての証を立てる努力をしながら、夏祭り支援を行っています。



### 復興住宅にて生活支援センターとの打合せ



### ⑦ 協働支援

クリスチャン同志が協力し合う姿を見せることは、最も重要なことです。私たちの示したいことが、明確に伝わります。また、クリスチャンではない支援団体との協働において、クリスチャンが積極的に関わり、リードすること

で、良い証となります。無理をする必要はありませんが、良い評価を得られるように努力することは大切です。それによって地域の方々は安心し、クリスチャンに対して良い意味で、「なぜ、あの人たちは？」と問うようになるからです。時間はかかりますが、このような問いが、間違いなく現場でささやかれるでしょう。



実践宣証会議の様子

#### ⑧ 安否を問う訪問

復興住宅地へ転居され、一年を迎える方もいれば、数日しか経っていない方もおられます。ある方は新居に移って直ぐ夫婦問題に悩み、またある人は離婚された方もおられます。そうした方々の相談を受けながら、祈りつつ、安否を問う訪問を続けています。また、早々に生活が苦しくなり、経済的な対応を望まれる方もおりました。幸いにして、「架け橋」

へ扶助基金として献金を捧げて下さった教会があったので、一時的な緊急支援として活用させていただきました。今では石巻市の仮設とも関係を持ち、車がないため野菜などを買えない不便な生活をしておられる方々のもとへ、カボチャを届けたりしています。そうすることで新たな生活苦を抱えた方との出会いに導かれて、お米を提供したり、話を聞いたり、安否を問う訪問が続いています。

#### ⑨ 野菜支援

元アジア学院教員・長嶋清氏と藤沢氏が、栃木県から軽トラックに乗ってカボチャや芋、さつま芋などを提供して下さり、一緒に野菜配布を致しました。さらに、特に困窮している方々には、お米の支援をしていただきました。一部は石巻市の子ども食堂（たべらいん）にお渡ししました。愛知県の別な団体からは、震災当初から、沢山のキャベツなどを送って下さり、配布させていただきました。また、ロサンゼルスにある教会から集まった献金で、地元野菜を購入し、仮設に提供したこともありました。それらはみんなから喜ばれる支援となりました。



#### ⑩ 扶助基金

6月頃、T復興集合住宅に入居されている扶助基金事務局長S氏が、約2ヶ月間入院されました。入院中であっても、集合住宅地に入居されている方の一部には生活に困窮する方がおられ、その間の事務等をS氏の奥様が対応しました。対象は6世帯ですが、母子家庭生活、障害者同士の家庭生活、後期高齢者の生活、独居老人の生活など、将来、起こるであろう日本社会の縮図があるように思えてなりません。T復興住宅地は扶助基金で対応できますが、しかし、他の地域にまで適応することはそう簡単ではありません。他の地域からも扶助基金の適用の声が聞こえてきますが、他の支援団体との協力のもと、祈りつつ対応を考えていきたいと願っています。



復興住宅自治会 シニア会

#### ⑪ シニア会と仙台市小旅行

2015年に、私の住まいから車で5分の場所に、復興住宅地が建設されました。この住宅地は、南三陸町、石巻市、仙台市から集まった方々による集合住宅地となっています。入居直後、自治会が発足するよりも前に、仙台市の社会福祉協議会とともに、コミュニティ支援の協力をしてきました。2016年には自治会が組織され、他の団体と協力しながら季節ごとの支援を行ってきました。今年の夏には、106世帯の住宅地から高齢者対象のシニア会が発足し、市内にある有名な場所へと小旅行に誘われ、そこで川柳を披露する良い時となりました。

#### ⑫ ゴスペル演歌

B.F.P. Japan（ブリッジス・フォー・ピース）からのお誘いを受け、イスラエルに行き、支援活動をする団体の視察をさせていただきました。聖書の世界にも触

れさせていただき、幸いな視察旅行となりました。イスラエル滞在の最終日には、学校訪問があり、藤原京子さんの音頭が披露されました。イスラエルの子どもや教師、地域の大人たちは、日本の文化を体験して大変に喜ばれました。その様子を見ながら、日本の地方でも喜ばれるのではないかと思い、東北でも「ゴスペル演歌」を披露してくれませんか、藤原さんに事情を伝えて相談したところ、快く引き受けてくださいました。藤原さんは、今年の7月から活動を始めて下さり、特に町内会の夏祭りでは盆踊りの依頼を受け、「御霊の実音頭」「ダンシングヒーロー」「ジョイ音頭」と、聖書の言葉（ネヘミヤ記）を聴いて踊る姿に将来の希望を感じました。また、別の会場では「御霊の実音頭」を聴いた異教徒の方は、感動して「今でも口ずさんでいる」と語ってくれました。藤原さんとは、今年、来年と、聖書のことばを携え、ともに被災地に向かう予定です。

⑬ 共に活動して下さる方々がいて

こうした働きの継続は、一人の力では決して続けられません。また、支援を続けて来た土地全体に、あまねく福音を伝える嗣業は、クリスチャン同士に存在する様々な壁を取り払う必要があります。それを理解し、震災直後から長く応援して下さる方がいますが、いずれそうした方々を紹介したいと思っています。今回はまず、「NPO法人シャローム」を紹介します。毎年2012年より、

北海道からフェリーに乗船して、平均4名、5名が訪れ、気仙沼市、南三陸

町、仙台市と「琴と太鼓」、時には舞踊も入れながらイベントを提供して下さっています。イベントに参加される方々のほとんどが高齢者ですが、日本文化の極まるイベントは、日本人として魂が奮い立つのを感じます。

「太鼓」にまつわるエピソードとして、気仙沼市に支援に来て津波被害の片付けを手伝う中、壊れた太鼓を見つけます。その太鼓を、許可を得て修復し、イベントに使用している等の話をしながら披露します。今後の活動については、話し合いの上、現場の状況を見ながら対応することになりますが、すでに来年に向けた備えが始まっています。このように、現場で共に活動することにより、地域との関係も深まります。多くの個人の方々、団体の方々は、イベントに必要な経済を自ら拠出して応援して下さり、それは御国を構築するための御業なのです。



⑭ キリシタン史跡ツアー

東北地方での史跡ツアーは珍しく、興味をもって下さる方々が大勢います。特にクリスチャンの方々は、殉教者たちの生き様に励まされるようです。また、今の日本宣教を考える示唆にもなって、課題を汲み取り、今でも手紙やメールで宣教への思いを伝えて下さっています。冬の時期は道路が凍結するため、冬以外の季節がオススメです。資料館については、何度見学しても新たなメッセージが心に届きます。カトリックの方々の協力により、カトリック教会の礼拝堂で静まることも可能です。ホテル観洋を利用したツアーは、旅行会社が入るため、仙台から一人25,000円となりますが、個人や少数であれば、現地の民宿を利用して安くすることも可能です。コースも様々で、みなさまの要望に応えられるのも魅力の一つかと思います。

11月からの活動は次回に報告を致します。

文責 中澤竜生



# 尊いご支援を心から感謝致します。

前回繰越金：80,000円

献金収入：1,591,410円（2017年7月1日－2017年11月30日）

ご献金を捧げて下さった団体様および個人様（敬称省略 順不同）

日本イエスキリスト教団京都教会、萱島キリスト教会、基督聖協団本部、基督聖協団習志野教会、基督聖協団上田教会、基督聖協団中川教会、基督聖協団千葉教会、基督聖協団西入間教会、基督聖協団若潮教会、基督聖協団八王子教会、基督聖協団青梅教会、新潟グレースネットチャーチ、清瀬グレースチャペル、ナガナワシュンイチロウ、サトウユキオ、基督聖協団信徒会、金原雅子、船堀グレイスチャペル、上海たんぽぽ、東北ヘルプ、大阪朝祷会有志、伊勢原キリスト教会、NPO法人シャローム、NPO法人B.F.P. Japan、南谷ご夫妻、基督聖協団目黒教会、渡邊季美、基督聖協団仙台宣教センター、Unibersity United Methodist、Church NozomiMission、TCUボランティア、

献金支出:1,323,200円(2017年7月1日-2017年11月30日)

車両交通費 508,362円（車両経費含む）、事務費、通信費 57,030円、啓蒙活動費 2,300円、

ネットワークサポート、慶弔費 11,200円、熊本活動費 37,108円、茶話会(Cafe)地域／自治会コミュニティ支援費 110,000円、

年中行事支援 20,000円、困りごと支援 90,000円、雑費 17,200円、謝儀 70,000円、架け橋スタッフ費 400,000円

次回繰越金：348,210円

## － ご協力をお願い －

銀行名：七十七銀行 宮城町支店

口座番号：普通 5497795

名義：キリスト聖協団西仙台教会かけはし会計 中澤佳子

ゆうちょ銀行口座名義：地域支援ネット架け橋(チイキシエンネットカケハシ)

店名：二二九店(ニニキュウ) (229)

口座の記号・番号：02290-3-141031

当座：0141031

PayPal(ペイパル)を利用してクレジットカードの支払いができます。

\*これにより海外より応援して頂く事も可能です。

PayPal検索用アドレス：[yoshiko.n36@gmail.com](mailto:yoshiko.n36@gmail.com)

事務局：地域支援ネット架け橋

所在：宮城県仙台市青葉区愛子東3-14-22

電話：090-1069-3925

事務スタッフ：中澤佳子

